

事を思ふものかな。左様におもうてもならぬ物なりといはれけり。敵の働かざる先に打つべきの處を知る、何れの敵にか勝たざらんや。といへり。享保紀開に、大猷公の時、御師範人柳生但馬守と富田越後仕合上覽可有之旨被仰出、金澤へ申し来る。既に發足之時節相定り、其時節に至り上意に、能々御思慮被遊候へば、柳生も富田も日本に無隠劔術なり。仕合被仰付時は、何れか一方は負けるべし。左あれば名人に疵付るなり。無用に可被成と被仰出、止みぬと。實は兼てより仕合不_レ被仰付思召なれども、かやうに上覽有るべきと被仰出れば、日本に相聞ゆる事也。武藝はやるやうにとの思召にて被仰出事ぞ。金澤の摩利支天山の堂は、其の時節建立也と云ふ。とあり。また混見摘寫に、富田越後方へ他國より仕合ひ習ひに来る人あり。越後今日は早令他行、明日來り給へと云ひて、柱に寄り懸り、脇刺を拔出し、左の手を懐へ入れ居たり。右仕合ひ望む人、左様に被成御座候ても、自由は叶ひ可申敷といへば、越後答へ云ふ。いかにも、御自分は居合、抜口勝口許を吟味せらるゝと見わたたり。ならばとつて見られよと、折かねより

下の方を持ちて出られたれば、御尤もと申して、さて明日參り申すべしと云ひ捨て、其の後來らずとなり。弟子中いかなる事にやと尋ねければ、先づ氣を取られては難成ものなりと被申けるとぞ。さて其の武勇なる事は、關屋政春の古兵談に、大坂冬陣の時、或夜城中よりつるべ鐵炮を打ち出す。その影敷事、百千の雷電の如し。諸手合夜戰と心得、諸陣騒ぐ事斜ならず。其の時富田越後守、利常卿の御先手の内なるが、手燭に火を燈し、馬に乗り、片手綱にて乘廻し下知したる躰、誠に生摩利支天とは、此の通りといふやうに見わたたり。となり。有澤永貞の古兵談殘囊集に云ふ。生田四郎兵衛死期に至り、富田越後守は御先手に被仰付事、必ず御手綱免され間敷と申上げたりと。是輕きやうにて國の大事也。とあり。今按するに、越後守武勇拔群なる故なるべし。又金澤卯辰山に、摩利支天堂を建立せしは、利長卿の時なり。三壺記に、富田越後は兵法を我が物とせし故に、愛宕山の傍に、利長卿の御下知にて、摩利支天堂を建立する也。と見え、寶泉坊由來書に、慶長十一年に、摩利支天堂造立、寶泉坊を爲別當。とあり。然らば大猷公

仕合一件に付き建立といふは、過聞なるべし。因に云ふ。武家耳底記に、富田勢源は富田越後が兄弟なれども、故有りて越前に住す。劔術の修行の爲め諸國を廻りけるが、美濃に至りける處、此所に梅津といふ刀術の達人有り。本は常州香取の住人なり。己が藝にほこりて、外に兵法はなしと稱し、勢源が来るを聞きて仕合を望む。勢源聞いて、兵法は凶賊を討つべきもの也。梅津と勢源、何の罪もなし。我が刀術未熟也とて、強ひて辭退す。梅津聞いて勢源越前にて口を聞く共、我が太刀先に廻らば助かるべからずと荒言す。國主齋藤義龍、梅津が荒言をにくみ、勢源の溫和を感じて、吉崎伊豆・武藤淡路守といふ者兩人を檢使として、達て仕合を望まらる。勢源辭する事能はず。吉崎伊豆が宅に於て勝負す。梅津は二日三夜身を清め信心を致す。勢源にも齋を進むる人あり。勢源曰く、我常に信心を致せり。事に望んで不可求と。己に其日に至り、梅津は數十人弟子をひきる、三尺六寸の木刀を袋に入れて持たせたり。勢源は一尺三寸の木刀を持つ。梅津、檢使に向ひて、眞劔を以て勝負せん事を望む。檢使其由を勢源に達し

ければ、勢源曰く、相手はともかくも、我は木刀を用ふべしと云ふにより、双方共木刀に成りたり。梅津立ち向ひて、獅子奮迅の怒りをなせば、睡猫の牙に一鼠を見たるが如く、聲を懸けて勝負す。梅津が首朱に成りて、血衣紋に懸る。梅津、勢源を拜み打ちにしなければ、勢源笑うて梅津が右の腕を打ちて、木刀を打落し、是を踏折りたり。時に梅津、腰刀をば抜かんとすれ共、不叶して倒れけり。勢源の勢ひ破竹の如し。梅津は直に逐電す。梅津が弟子共、勢源を大勢手組みてねらひけれ共、義龍より人數を付けて、難なく越前に送りけり。其弟子關清安と號す。實は勢源の事也。劔術の奥旨を傳へて、加州に來り子孫今に刀法を指南すと。又享保紀開に云ふ。富田越後の家來俣野六兵衛と云ふ者、大坂夏陣の時分、越後の供をして出でたりしに、馬を不持。如何せんと思ひながら松任迄歩み行く。夏の水と云ふ處に到る時、いづく共なく野髮なる鞆毛の馬鞍置きたるが放れ来る。主は知らね共、よしや咎めん時こそ返さめとて、其馬に打乗り、終に大阪迄至り、此の馬に乗り出でたり。或時此馬強く立つ。引きて行く程に小坂を越えて馬靜